

いのちをつなぐ水と流域・地球市民対話プロジェクト
地域フォーラム 2024 in Osaka

「暮らし」と「河川」の関係



京都産業大学現代社会学部

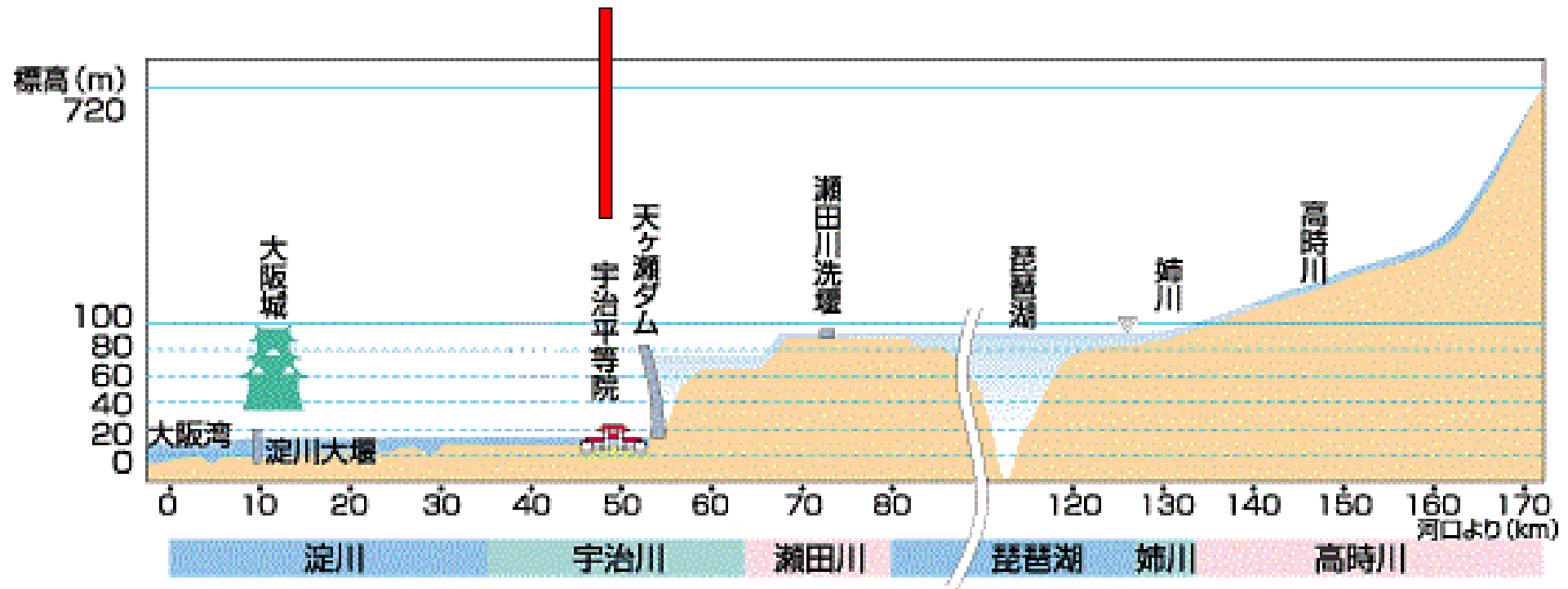
教授 鈴木康久

琵琶湖・淀川流域



船がつかなく、琵琶湖・丹波・伊賀から大坂

〔縦断方向に地面を切ったら〕



淀川流域の中心にある三川合流部



近年の河川、注目は水害

三川合流点の状況



暮らしと河川の関係

河川管理

(水と共)平成9年

「治水」・「利水」

明治29年・昭和39年

「堤防・治山」・「用水・水運」

江戸時代

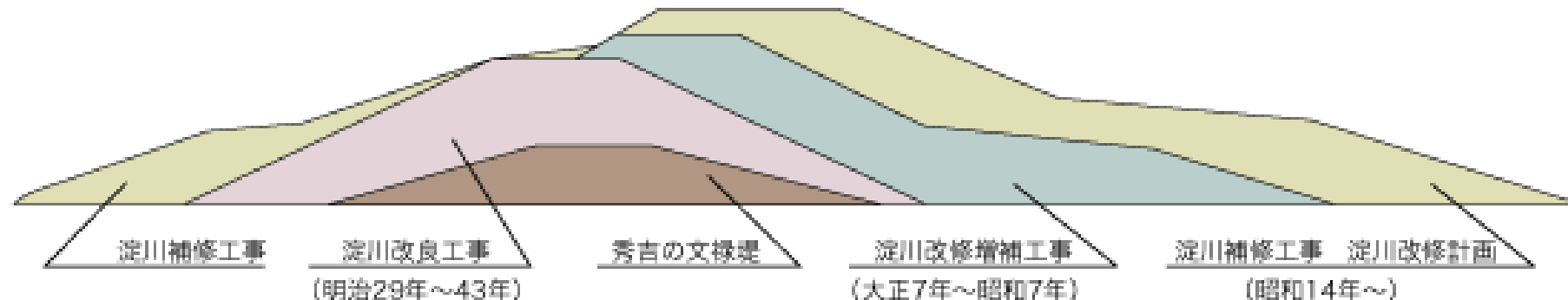
豊臣秀吉の存在



(近畿農政局HPより)

文禄堤(1596年:文禄5年2月)

- 伏見から大坂の淀川兩岸の堤防(文禄5年2月)
「吉川家譜」より
- 京街道(東海道の一部)
- 淀川右岸(摂津の国側)1万5281間(27.5km)
内 山崎辺りの4000間(7.2km)を吉川広家が担当
⇒ 文禄5年8月(伏見大地震後、増田長盛から広家に書状)



過書船

1598年(慶長3年):豊富秀吉が朱印状(運上金 銀200枚)

※ 川船支配方に河村与三右衛門、木村宗右衛門

※ 1613年、河村から角倉与一へ

• 株 数:過書株(162株)

• 舟名代:7組(淀組、京組、鳥羽組、越組、中越組、大坂組、尼組)

※ 『淀川ものがたり』より

• 1681年(天和元年):淀船453艘、過書船449艘(『井手町史』より)

• 1698年(元禄11年):伏見船 200艘(若年寄 米倉丹後守が許可) 15石船

• 享保年間(1716-34年)

三十石船 671艘、 淀二十石船 507艘、 伏見船 200艘(参考)

※ 『淀川』(大坂文庫)等より

過書船・伏見船の内訳 (元禄13(1700)年)

過書船: 606艘、45,810石	
250石	13艘
200石	37艘
100石	41艘
50石	99艘
20石	0艘
伏見船: 200艘、6,110石	
100石	1艘
50石	11艘
30石	103艘
15石	22艘

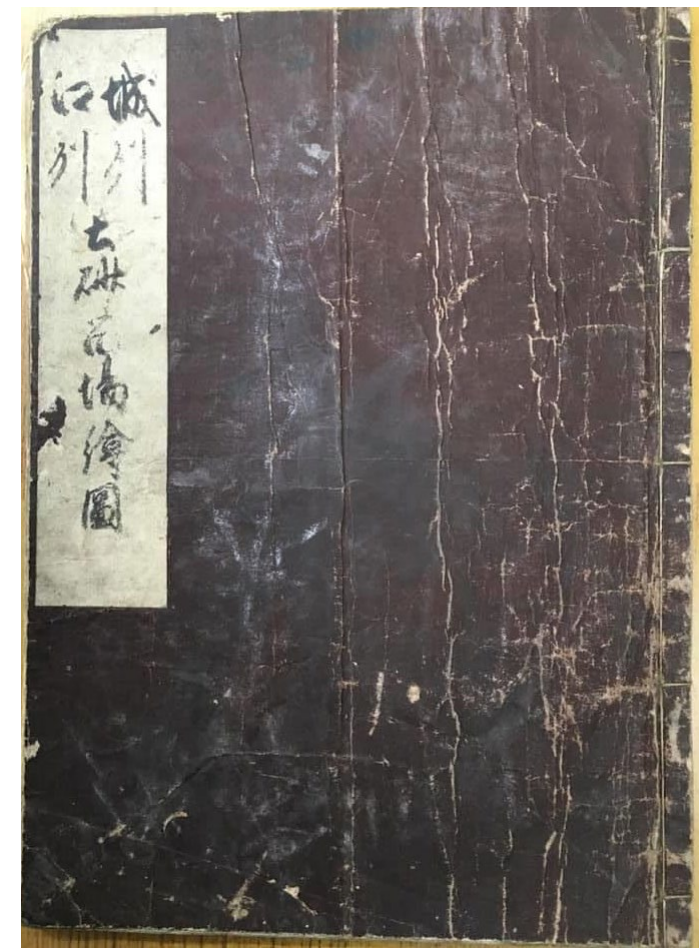
第4表 過書船・伏見船現勢表
(元禄13年)

船種	8月現在 過書船数	6月10日現在 伏見船数
二百五十石船	13 ^石	0
二百三十 "	6	0
二百 "	37	0
百八十 "	6	0
百七十 "	9	0
百六十 "	5	0
百五十 "	2	0
百三十 "	12	0
百十 "	4	0
百 "	41	1
九十 "	22	1
八十 "	25	2
七十 "	59	3
六十 "	48	5
五十 "	99	11
四十 "	99	32
三十 "	46	103
十五 "	0	22
小三船	73	—
屋形船	0	10
手くり船	[(元禄2)15]	10
計	606	200
総積石高	45,810 ^石	(尾形船、手 くり船を除く) 6,110石

注 矢崎文書により作成。

※ 『畿内河川交通史研究』より

城州江州土砂留場絵図





京都産業大学 図書館所蔵

治水と治山：1660年、1666年、1684年

1) 1660年(万治3年)3月14日

老中：稲葉正則、阿部忠秋、松平信綱から、

上方郡代：水野忠貞、五味豊直。奈良奉行：中坊時佑

「山城、大和、伊賀の三ヶ国の山間部では木の根を掘るので、洪水の際、淀川・大和川筋に土砂が流出して川が埋まる。今後は木の根を掘らぬようにし、苗木を継続して植えるように、厳しく触れられよ」
(日本林政史資料より)

2) 1666年(寛文6年)3月 「山川掟之覚」

大坂町奉行：石丸定次 から 摂津・河内の国

「近年は山々の草木の根まで掘りとるので、風雨の際、川筋に土砂が流失して水の流れがとどこおる。今後は草木の根を掘り取ることを禁止する」
(三宅家文書より)

3) 1684年(貞享元年)3月

土砂留令(3か条)

- ① 山間部の木草の根の掘り取り禁止
- ② 植林の敢行
- ③ **川筋、河原での新規の新田畑開発の禁止**
竹木・葎萱(よしかや)の植え付けの禁止
川中への新規突出しの禁止
山中での焼畑の禁止
土砂流出のする古田畑は、木苗、竹唐、葎萱、芝

1684年((貞享元年)8月 制度化(年2~3回、家臣を派遣)

畿内の11人の大名に所領、幕領、私領に**植林**を命じる
明治維新まで続く

(御触書寛保集成より)

「利水（昭和39年）」のための「治水（明治29年）」

淀川の舟運

文禄堤

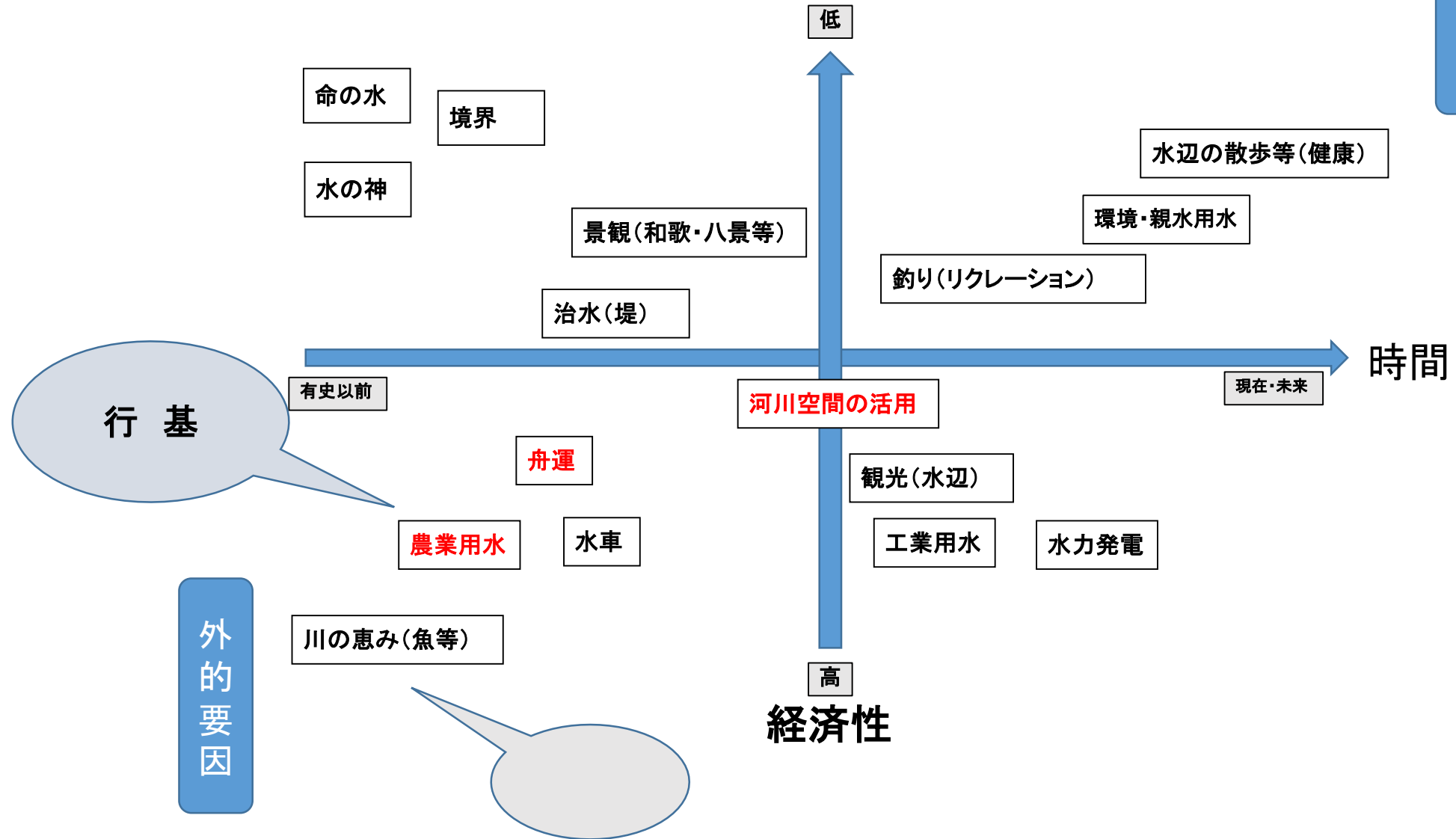
水制工

河口の舟運

川ざらえ
治山・植林

階段護岸

水の活用等 概念図



河川の価値をどう捉えるのか

- ◆ 経済的価値
- ◆ 空間的価値
- ◆ 宗教的価値
- ◆ 心理的・美的価値
- ◆ 身体・健康的価値

河川の
多様性

京都・千年の都

新たな河川の可能性を淀川流域から